

り行きにまかせていこうと思っている。何か事が起きたら、私たちの愛情でしっかり育てていきたい。全力で守っていききたいです。

⑦相談相手：◎里親会の仲間、友だち、担任

⑧養育返上は1,2度考えた。男の子でパワーがあるので、戦いごっこの時など、すごい勢いで叩いてきたり、言うことをきかない時に。

5)その他の意見

子育てについて、種々話を聞いてくれたり、アドバイスをしてもらえる場所があるといいなと思う。(以上)

27. 里父の熱い心に応えてくれる日を待ちながら

－交流期間中ずっと泣き続けていた2歳児

1)概要：

A (15歳 高校生男子) 2歳から現在まで13年間養育

Aの実母は生後7日でAを手離し、姉が2人いるはずで、祖母が育てている。男の子は育てられないとのことでAを手放した。

2)里親の家族構成：

里母は50代で、里父も50代の勤務者。実子21歳(大学生)でAと4人家族。里父は施設で成長した人。里母はのんびりタイプで、家事や子どもの世話はあまり好きなほうでない。活動的な里父は、家事も育児もこまめにこなすタイプのような。

3)受託に至る経過：

Aの委託まで、里父は10年ほど施設の子どもたちとキャンプやハイキングをしていた。施設を出ても職や住まいを転々とする者が多く、就職やお金の相談をしば受けた。その中で、子どもを幼い頃に家庭で育てることの大切さを感じ、実子は1人だけにして、実子8歳の時、乳児院にいた2歳11カ月の里子(A)を引き受けた。それ以前も、被虐待児を預かろうとしたが不調だった。

Aとは3カ月間交流(24回)したが、その都度泣く子で、度々「にゅうじいん、かえる(帰る)」と言う子だった(後に記載)。

委託直後は皮膚がガサガサだった。様々な不適応行動がその後始まった。睡眠、食事行動などに問題があり、対人関係にムラがあった。この大変さは、他人には理解してもらえないだろう。子どもの心の傷に寄り添うのは無理ではないかとすら考えたが、施設に返せば再び捨てることになる、懸命に頑張ってきた。

その場でいちばん影響力のある人、力のある人を見つけ、まずはその人に甘える。乳児院で、「後追いさせれば保母失格？」と言う扱いを聞くこともあるが、そのためなのだろうか。

Aを育てる経過の中で、里親ホームページを立ち上げた。その頃「反応性愛着障害(RAD)」の存在を知る。種々の悪戦苦闘の日々の中での結論は、愛着障害をもつ子には「愛情と規範、忍耐」が必要だということだった。子どもが悪魔に見えることもあった。赤ちゃんがえりする子、大人はしょせんすぐいなくなると思っている子どもたちなど。

4)以下Aとの面会記録(里親のHPに、1996/10から1999/5迄に掲載された)より引用

①良好な第一印象だった

面会1回目:1998/7/6初めて乳児院に会いに行く。穏やかな雰囲気のおとなしい子。寂しげで、はにかみ屋の様子に心がくすぐられた。ちょっとヒントを与えるとパッと反応し、機転がきき、頭のいい印象。夏ミカンをほしいと言ったらダメと断った。貸してというと、手渡してくれる。

②里親家族に慣れず、長期に泣き続けた子

面会2回目:実子を連れていく。抱っこしてやる。実子(小2)の動きを目で追う。夏ミカンを渡すとほうり出す。部屋に入るとなぜか泣きだす。実子が「この子、僕がいると驚いて泣くみたい」と後ろを向く。しばらく抱っこしていると泣きやんだが、いやいやをしている。保母は、先回の交流の後で機嫌が良かったと言うが。

3回目:やはり泣く。実子(小2)が「この子、僕のこと嫌いなんだ」と泣きだす。1時間半泣き続ける。

4回目:面会に来た里母の顔を見たとき泣きだす。宿題をもって行った実子が「うるさくて宿題が出来ない」と怒る。

5回目:泣くが、保母が水浴に誘い、戻ってからはそれほどでない。

6回目:泣いた後で寝る。目覚めても昼食を食べない。泣きながらも抱っこされると体を寄せてくる。

9回目:いつもは壁にへばりつき泣くのだが、今回は泣かなかった。おいでと言うと泣きだす。出したおやつを食べない。30分ぐらい抱っこしてから、食べるかと聞くと、うなづいて食べる。(10、11回省略)

12回目:壁にへばりついて泣く。大人にするような内容で説教すると泣きやむ。「君はいつまでもここにいられない。3歳になったら、ここを出て養護施設に行く。私たちは、君の親になろうと思って通っているが、最終的に決めるのは君である(中略)その年<2歳7カ月>で私たちのところに来るか、決めるのは酷ではあるが、君次第である」分かったかどうか分からないが、イヤイヤをしていたのがおとなしくなった。しかししばらくして保母が持ってきた食事を拒否。説教する(「食べなさい、子供は食べる、遊ぶ、寝る、これだけやっていたらいいんだから」)途中でご飯とみそ汁だけ食べる。その後里父の定期入れをいじって、始めて笑顔をする。

13回目:(8/15)はじめてのお泊り。職員の見送りを玄関で受けて、乳児院から外へ出ようとすると泣きだす。駅まで泣き続ける。コアラのマーチ(お菓子)で泣きやむ。電車でも泣き続ける。その後も泣いたり泣きやんだり。家に着いて、出てきた猫を見て泣く。

お昼寝のあとで公園に行く。6時半に「夕ご飯だよ」と手を洗わせようとする、「ごはんたべない、にゅーじいんかえる」と泣きだす。抱いているが泣きやまず「泣くんじゃない」と里父が思わず怒鳴る。説教する。「お父さんのこと嫌い?」と聞くと首を振る。「お父さんはT君のこと好きだよ。一緒にご飯を食べよう」というと泣きやんで椅子に座る。所持して、入浴。本を読んで意思表示。寝る。

夜中に何度も目を覚ます。

(8/16)翌朝目覚めて、少し言葉が出る。公園に行く、プールでこわばる。ブランコ。よく笑う。かわいい。食事。その後で乳児院に連れ帰る。乳児院に着いたときたんにはしゃぎ。

13回目、14回目:里母と実子が乳児院に。泣かなかったが、ずっと抱っこしていた。

16回目:2度目のお泊り。今回は乳児院を出るとき泣かなかった。自治会の草取りに連れていく。大勢の大人にかまってもらおうと嬉しそう。名簿を破いて叱られると「にゅーじいんかえる」と泣きだす。

17回目：里母と実子が面会。

18回目：3回目のお泊まり。乳児院について「Aくん」と呼ぶと出てきたが、抱き上げると泣きだす。

19回目：里母と実子が行く。泣かないで、ずっと抱っこ。

③心が解けはじめる

20回目：4度目のお泊まり。電車の中でも視線を合わせず。夕食を食べ、銭湯に行く。はしゃぐ。「おとうさん、はだかにしちゃおう」乳児院にもどるが、食事せず。

21回目：5度目のお泊まり。新幹線を見に行く。帰って(テレビを見ながら)「乳児院とお家、どっちがいい?」「にゅーじいん」。しかし膝に乗ってくる。

帰りの電車で「おとーちゃんのおっぱいおしっちゃおう」と自分からふざける。乳児院につくと、保母に手をつながれ、じっと見ている。思わず「おいで」というと、抱きついてくる。チュウしてくれると言うとチュウしてくれる。

22回目：お泊まり

レタスを食べない。怒鳴ると横をむいたまま。「大人をなめるんじゃない」というと泣きだす。出勤して帰ってくると「おとーさんどこに行ってたの」と言う。だんらん。翌日午後帰る時に、里母が「乳児院とお家どっちがいい?」「にゅーじいん」「お母さんのこと好き?」首を振る。「お父さんのこと好き?」うなずく。里母がむくれる。帰りの電車「はだかにしちゃおう」と遊びながら帰る。乳児院で別れる時、じっと里父をみている。

23回目：乳児院につくのが遅れたら、泣いていた。一緒にいた息子とじゃれ合う。

24回目(10/3)長期外泊；だんらん

(10/6)里母の出す食事を食べなかった。里母は「乳児院に返す」と怒っている。帰って来た里父にTは「食べた」と嘘を言う。「そんなにお母さんが嫌いなら、家にいられないぞ。乳児院に帰るか」「にゅーじいんかえる」「嘘をつく子はうちの子ではない。乳児院に帰ろう」と抱き抱える。外に出ると「おうちがいい」親はキレそう。我を張る時はおしりをたたくことにする。(後略)

④退行と防衛

98/10：夕食のレタスを食べないので、口に入れたら30分固まる。隣室に連れて行き、長い説教をする。顔をそらして立っていたのが、宙を泳ぐような格好をして、無意識に体が動いているようで、そのうち段々動きが激しくなる。声をかけると胸に崩れてきて、いつものような甲高い泣き方でなく、赤ん坊のような低い泣き方をして、背中をさすっていたら、10分ほどで寝てしまう。

⑤里母の訴え

1. 最近、今まで出来ていたことを急にしなくなった
2. 最近、今まで食べていたものを、急に食べなくなった
3. 里父が家にいる時と居ない時では態度が違う
4. 里父の言うことは結構素直に聞くのに、自分ひとりの時は全然聞かない (後略)

5) 高校生の現在：

①問題：夜中に家を抜け出し、朝まで帰ってこない。学校を時々休む。しょっちゅう学校を遅刻する。

②健康や発育：あまり問題はない

③性格：とても一わがまま、落ち着きがない、わりと一素直でない、無気力、嘘をつく、約束を破る、反省心がない、物事を自分に都合のいいように考える。

④学習状況：成績下、得意は歴史、それ以外は苦手

勉強はとても嫌い、学校はやや嫌い、宿題はなかなかしない、友達関係は普通

⑤親子関係：何となく気持ちを通じ合わない。思ったことは遠慮せず叱る

⑥親の相談相手：◎里親会の仲間がほとんど。カウンセリングはAが何度か受けた。

⑦委託の返上：1.2度思った。児相には相談しなかった。

⑧里親としての心配：高校卒業ができるか。大学に行ってほしいが。

6)さかのぼって里家に来た時から現在まで

①誰にでもべたべたしていた子。知らない人でもついていく(度を越している)。過食が止まらない。何にでも触り、時には壊す。夜なかなか寝ない。のべつまくなしにしゃべり、黙っていることができない子だった。

②Aの現在一逸脱行動がやまない

現在高1で13年預かったことになる。里親姓にしている。

③2人を「きょうだい扱い」しないで育ててきた

「一人っ子を2人育てる」との方針を里母が主張。無理してきょうだいにしないという方針から、きょうだい扱いをしてこなかった。校長ですら2人が兄弟とは知らなかった。だから13年間里家にいても、「きょうだい」にはなっていない。しかし兄には思いがあるかのようで、他人に里子を「弟のようなもの」と表現。問題は多い弟だが、可愛いと思っているのではないか。兄の高校受験の自己推薦文に里子養育の件を書いたらと親が勧めたが、兄は「里親は親がしていることで、自分には関係がない」といった。Aの起こすトラブルは里親が引き取っている。小学校は6年生と1年生の1年間だけ実子と里子は同じ学校に通学した。

④現在の問題：長期にわたる非行傾向

お菓子などの万引きや金の持ち出し。(千円、1万円と)

最大の事件は、小3の時に7人で集団万引き。スーパーなどでお菓子、ゲームカードをとる。里父が中心になって金額等の記録を作り、スーパーに弁償した。中1で、自転車を盗まれる。その後Aは、置いてある自転車をカギを壊して乗り回したが、水泳の部活に必要なので、買ってやらないわけにはいかない。

その後もDVD、文具など万引き。警察に補導される。13歳なので、そのまま放免。

高校入学後は、夜遊び。地元のグループと一緒に？年長者は19歳。その子に言わせると「彼らが来るんです」

⑤実子への影響：実子は中学の時、勉強に集中できずに成績が低下。塾や家庭教師をつけて挽

回をはかった。Aがいなければもっといい大学に行けたのではとは、兄本人は言わない。

⑥Aの里子意識：「僕は何歳までここにいられるの?」「なんで早く迎えに来なかったの」「ほんのお父さんは?」などと言う。里親が実親でないことは知っている。なついているのは、里母よりも里父で、実子もそう。

⑦心がつながらない子

何かしら情がつかない子。実子の場合は自分のことのようにわかったが、Aにはそれがない。Aは、叱られても心に残っていないかのようなのである。叱る方の心が入っていない。けろろとしている。べたべたするが、別におべっかを使うという意識ではなさそうだ。優しく叱ると「まだ大丈夫」と思ってしまうので、何度もきっぱり言うことが大切だった。

7)この先：

Aが18歳になって自立したら、もう1人預かってもいいと思う。(以上)

3)家庭養育か、施設養育か

20. 里母が体調を崩して措置変更

—とても理解のできない行動の数々だった *被虐待児

*里母の感じた虐待の影は、「実母も実父(実は継父)も大嫌い」と言い、近所の大人には人懐っこく接するが、里親の家族にはとても反抗的だった点。

1)概要：

6歳女児で、4か月手を尽くして養育したが、里母が体調を崩して措置変更

2)里親の家族構成：

Aの養育当時は、里子A(6歳)と同居していた実子1人で4人家族だった。現在は高2の子を里子として養育中。実子は現在20代後半、20代後半、10代後半。里母は50代、里父も50代で公務員。

3)里親登録の動機：

虐待などの事件を知り2人で話し合い、里親になった。

4)事例：

A：6歳女子(1年生)

①児相の強い希望で

実母と継父のもとで虐待されていた子で、2歳で保護され、施設で保育士によって「愛着トレーニング」を受けて、里子にしても大丈夫と児相から言われた。次々と里親希望者と見合いしたが、うまくいかなかった子だったと聞き、よけいにかわいそうだと思った。

施設から幼稚園に通っていて、6月から交流を開始し、里親は夏休み位の委託を考えていたが、(児相が幼稚園をかわらせるのは可哀そうと判断して)、委託されたのは翌年3月だった。「家族から見放されている子で、委託先は〇〇さんしかいない」と施設長から言われて、施設長

の強い希望を感じて引き受けた。

②施設長の説得で

里子のいた〇〇施設は少人数で、いい施設だったので、ここにいたほうがいいのではと何度も施設側に言ったが、本人には家庭が必要と施設長が言い、どうするかは「本人に決めさせる」とのことだったが、本人も「行かない」と里親にも言っていた。

保育士、施設長が里親のもとに行くようにとAを説得した。家にも地域にも学校にもなじみがなかったし、学校に行かせること自体が難しかった。後日「あなたは交流の時と(性格や態度が)違うじゃない」とAに言ったら「あたり前」と言った。修羅場だった。

③家族に立つ波風

息子(実子)は心の優しい子だが、Aの里母に対する態度を見ていて「子どもを虐待する親の気持ちがわかった」と言い出した。よい関係が築けない、うまくかかわれないと児相に相談に行ったら、「試し行動の場合もある。可愛いと思うこともあるでしょう」と、こちらの気持ちを理解してもらえなかった。以前施設に委託された時に、保育士との愛着関係を築くことができたから大丈夫と説明された。困り果てて、施設に相談に行ったら、初めて、関わるが大変だった事を具体的に聞かされた。施設に来た頃は全く笑わなかったとか。泣き叫ぶ、暴れる、物を壊すなど、家での状態と全く同じだったようだ。(それならレスパイトと言う制度もあるしと児相から提案されたが、よくわからず、それっきりになった)

④当初の3ヶ月；

ひたすら大変だった。反抗的、暴言、暴力、里父になつかない。里母が、40度の熱で寝込んでも、起こして引っ張りまわそうとした。学校へ行きたがらず、行ったら帰らない。

交流中に感じたことは頭の切れる子で、「施設の先生は、そうは言わなかった」としばしば言った。家庭と施設のダブルスタンダードで、本人はそれを利用して大人を思い通りに動かそうとする。

⑤発育と健康(6歳10ヶ月)：わりと一ふとり気味、よく食べる

⑥性格：とても一わがまま、落ち着きがない、素直でない、言葉が荒い、感情の起伏が激しい、人に心を閉ざす、警戒心が強い、よく約束を破る、反省心がない わりと一小心、無気力、劣等感が強い、パニックを起こす、すぐに暴力、嘘をつく

基本的には、この子は、まったく理解できないという感じだった。

⑦学習状況：中の下、体育が得意、算数が苦手、勉強はやや嫌い、学校へ行くのはとても嫌い。宿題はなかなかしない。友達関係はあまりよくない。

⑧親子関係：どうしても気持ちが通じなかった子。

里母がストレスで体調を崩して措置変更。(以上)

18. (収録否)この子にとって適切な生育環境は家庭か施設か
—子どもに伝えたいことを養育家庭の中でと里親になったが

19. 家庭で育つより施設のほうが安定する子？

—なおも残る愛着形成上の問題

*ネグレクト

1)概要：

A(7歳男子、小2)は、5歳から約2年間養育、ネグレクト。出生から2歳8か月まで実母と各地を転々としていた。実父は実母が妊娠中に失踪。家庭復帰の望みがない子と職員に言われて受け入れた。

2)里親の家族構成：

里父母には実子がなく3人家族。里母は30代、里父も30代で勤務者。

3)里親登録の動機：

里母は小学生低学年の頃、「ストロベリー探偵団」の漫画を見て、孤児院の状況に関心を持った。小さい時から子どもに関心があり、両親は共働きで忙しかった。弟が一人いる。里母は介護職(ケアマネージャー)につき、しばらく子どもを作らないようにしていたが、時間の余裕があったので、フレンドホームのボランティア募集を知って希望し、その折に担当した子どもがA。里母は仕事を辞めての養育。親戚は引き受けるのに大反対だった。

4)事例：A：7歳男子

2歳8か月から施設に入る。Aを受け入れたのは5歳6か月。思い立ってから2泊3日の外泊支援を含め、交流が2年間。

①特徴：

ネグレクトで、体も小さく、学習が定着しない。愛着形成に障害があるのか、里親と離れても泣かず、知らない人と平気で遊んだりする。

②当初の動揺：

里家に来た時、ここにずっといるとわかると、Aは動揺し、興奮、暴力的言動、早朝覚醒がみられ、近所の友だちの家に行きたがった。一人でいられず、いつも人を求める傾向がみられ、里母も仕事を辞めての養育だったので大変だった。

Aは、むしろ「集団の中において安定する子」で、現在も愛着障害の存在を強く感じる。当初は常に人を求め、一人遊びができなかったが、現在は家庭で落ち着いて遊べるようになった。「お母さん、僕のことをずっと抱っこしていてね」と言ったりする。自分の気持ちを暴力で表現する子だった。幼稚園に通わせたが、身支度に時間がかかる、工作ができない、集中力が低く、注意が(本人に)入らないと言われた。小学校では、家庭のルールが身につけていないことが分かる。小言がAの中に入るようになる迄1年かかった。

③発育と健康：とても一体がちいさく、偏食。わりと一小食(最近も同様)

④性格：とても一甘えが強く、すぐ泣く。わりと一小心、すぐ暴力に出る、ウソをつく。

入学前健診で、知的にも、行動的にもボーダーと言われた。それを聞いて、この子をこれからどうやって育てていけばいいのだろうと不安だったが、伸ばせるところは今から少しでも伸ばしてやりたいと思った。親の経験がないからこそ、種々あっても子どもはこんなものだろうと、やってこられたのだろう。

⑤学習状況：成績は中の下。算数、図工が苦手。得意なのは音楽。学校は好きで、勉強もふつう位に好き。宿題等は毎日のように見てやる。学校での友人関係もわりといいが、友人との適切な距離感がわからない。担任には1年生の後半から里子であると明かす。2年生になっても、他人にべたべたしていたが、友だちが受け入れてくれた。生活習慣はあまり確立していない。

⑥親子関係：時々気持ちを通じないと思うことがある。今ではそう感じることも減って来たが。叱るときは、感情的にならずに、遠慮せず叱っている。だいぶ指示が入るようになった。音楽療法の効果かもしれない。

⑦預かって6か月位まで、養育を返上をしようと何度も思った。幼稚園に迎えに行っても、里母のところに来ないで、他の人にべたべたする姿を見たり、ツバ吐きや暴力、暴言があり、情緒不安定で。しかし里父や施設職員のサポートがあり、さらに音楽療法に出合っ、発達心理の先生にサポートされ、Aが少しずつ伸びていく姿に感動して、養育の返上を思いとどまった。

⑧音楽療法に出会う

友人に紹介されて、民間の発達支援機関で療育(音楽療法)を受けさせた。短期間で行動の改善がみられた。幼稚園で初めて自分から絵を描いたり、音楽療法のセッション後に迎えに行くと「お母さん、ほくのこと、ずっとだっこしててね」と2週続けて言ったりなど、甘える言葉をストレートに出すのは、委託後初めてだった。それまでは叩くことでしか自分を表現できなかったが、「こっちへきて」と言葉で表現できるようになったり、集中して座れるようになったり。

しかし、人との適切な距離感がわからず、大人にも必要以上にべたべたしたり、あまり親しくない大人にもなれなれしく、過度にスキンシップをしたり、人の手足に口をつけるなども残り、その都度注意はするが、改善にはこれからも時間がかかりそうだ。里父は甘えさせ上手で、父子関係は極めて良好。本当の親子のようである。(以上)

II) 心理的・発達的問題

1) きょうだい葛藤

9. きょうだいで預かった里子間に生まれた愛憎の葛藤

一血のつながった兄弟だから、すぐに弟を受け入れると安易に考えていたが

1) 概要：

小学生A(8歳男子)は2歳より現在迄6年間養育。兄A2(16歳男子)は5歳から現在まで10年間養育した。2人とも生後すぐ実母から乳児院に預けられた。引き取った後で、AとA2のきょうだいの対立が激しく、何度も養育返上を思った里母だった。

2) 里親の家族：

里母は50代(この3月で退職)、里父は50代で勤務者、実子は20代後半が2人で自立。現在は里子2人(兄16歳男子A2、弟8歳男子A)の4人家族。

3) 里親登録の動機：夫婦とも児童養護施設の指導員の経験がある。施設では、信頼関係ができて、家族のような心の「寄り処」には中々なれないことを実感していた。母の顔さえ知らない子どもには、職員が寄り添っているつもりでも、「先生たちには帰る家があるでしょ」と言われたりする。非行をして注意しても、こちらの思いがなかなか子どもに伝わらない。夫婦とも転職して、2人の実子に手がかからなくなった頃、元の職場の同僚からの依頼。夫婦とも社会的養護に関心があったのですぐ登録した。

4) 事例：

<事例1> A2(Aの兄)

5歳迄施設で育ち、5歳から現在まで10年間養育、現在高1。

委託された時「難しい子だから」と言われ、施設職員の経験を買われての依頼だった。

施設では、負けん気が強く、生意気なところがあったので、子どもの中で暴力を振るわれていたという。

① 弟がいた！

兄が家に来てから4年経った小3の時に、パスポートをとろうとして、7歳年下に弟(A)が乳児院にいることを知った。兄は日頃「弟がほしい」と言っていたので、戸惑いもなく、すぐ弟を引き取る手配をした。兄は驚いていた。

それ迄は兄に「実母は心の病気で子入院している。大きくなったら会える」と言ってあった。「病気がなおったの?」「なおって結婚したけれど、子どもを育てられない、また病気になるから」「おじいちゃんやお父さんは育てられないの?」と質問。動揺していた。里親は「きょうだいは一緒にいたほうがいい。でも、どうするかはあなた次第」そして「弟は、おばあちゃんが育てていたということにすれば」と話して、兄は落ち着いて、弟を引き取ることになった。なかなか愛着関係が築けなかった兄だったが、「弟がほしい」と言い出したことで、引き取った後の兄弟関係には不安もなかった。

② 兄弟の心の葛藤：

弟(A)を施設から引き取ったら、予期に反して兄は弟を可愛がらない。やきもちがひどく、脅したり、けなしたり、言葉を荒げて威嚇する。注意すると、ますますひどくAに当たる。見かねて「これではA2が幸せにならない。Aも幸せにならないから、乳児院に返したい」というと、「Aを返すなら自分が出て行く」と離れるのを嫌がる。弟を可愛がろうと思うのだが、それできない。可愛がる表現をしようとするが、ついやきもちになり、強く当たってしまう。兄は弟への接し方を変えられないまま、思春期に入り、現在も弟や里母にあたることで、ストレスを解消している。

<事例2> A：A2の弟、8歳男子

① 養育に専念した里母：

はじめ里母は1カ月休職して、Aと信頼関係を作ろうとした。Aは初めの3カ月、眠りにつけない、泣いたら泣きやまない、泣き声が異常に思えるような甲高い声で泣く、などがあった。言葉のキャッチボールがうまくできない。就学時健診でボーダーラインと言われる。

② 健康と発育：現在、とても一過食、わりと一太り過ぎ、夜尿など。受け入れて初めの頃は偏食、過食などがあった。

③性格：明るくひょうきん。とても一素直でない、わりと；わがまま、人みしり、小心、言葉が荒い、感情の起伏が激しい、人に警戒心をもつ、反省心がない

自分でできなかつたり、傷ついたりすると人のせいにして怒り出す。いやなことは受け付けない。寝つきが悪いのは今でも。幼いころ、読みきかせを何冊もしてやった。

④学習状況：成績は中の下、苦手は算数。得意な科目はない。授業はマイペース、マンガを読むのが大好き。勉強はとても嫌いだが、学校へ行くのはふつう位に好き。学習力が弱い。授業参観では、分からなくても「はい、はい」と手を上げる。今でもそう。

PTAでは養育家庭であることを話してある。勉強は嫌いだが、本を読むのは好き。

勉強は毎日見てやるが、自分から宿題はしない。学校の友だち関係はとてもいい。友だちと一緒になら、苦手な事にも取り組む。忘れ物をする。提出する物をもたせてやっても先生に提出しない。生活習慣が身につけていない。テレビを見過ぎる。

⑤親子関係：時々気持ちが通じない。

⑥里親の困っていること：マンガを読みだすと、登校時間も忘れてしまう。約束をすぐ破る。話し合う時チャンネルができず、一方通行になる。ギャングエイジにさしかかり、反抗心も出てきて、攻撃的になる。兄の態度が見本になっているのか、暴言が多く、やくざが2人住んでいるような日常。表出している部分だけみていると、辛くなる。里母は、措置解除したいと思うことが多くなる。Aも、里母に対して「自分の要求を受け入れない人」と毛嫌いしている感じがある。里父は「なんでも自分の要求を受け入れてくれる人・味方」で、大好き。

⑦兄弟関係：

弟は兄との間に緊張関係がある。恐怖心がある。顔色をうかがいながら接する。兄の言うことには逆らわず、何でも聞く。凄く嫌いと言うわけではなく、兄は優しい時もあるとのこと。

⑧心配していること

気持ちを入れて人に返すことができない。言うことをきかない時に、いくら言ってもこちらの気持ちを理解してくれない。里母のために何かしてあげようと言う気持ちがない。「頭が痛い(里母)」「それなら自分が代わってあげよう」とする気持ちがない。口では「可哀そう」と言っても、思いやりがない。要求しっぱなし。

⑨「引き取らなければよかった」

1. Aは2歳で引き受け、里親自身がAを「可愛い、可愛い」「兄に可愛がられなくて可哀そうな子」と、Aを守ろうとして接してきたが、それがきょうだいの間に溝を作ってしまったように思う。「血のつながった兄弟」だから兄はすぐに弟を受け入れると安易に考えていたが、その間に兄の嫉妬は強くなり、そのことで何度も話し合ったが、なかなか改善されず今日に至っている。

2. また、Aには次第に学校で発達面での課題が多くなり、それを解決しようと里母が必死になった結果、Aとの関係が冷静に保てなくなってしまった。A2はその点での問題は比較的になかったのも、客観的に子育てができた。しかしAには母親という立場が強くなり、自分が産んだ子どもと錯覚してしまったのかもしれない。里子をきちんと育てなければという使命感と、親としてのメンツにこだわり、Aが「やりたくない、いやだ」と主張すればするほど、「なぜ？」と自分とAを共に追い詰めるようになった。やがては子育ての自信喪失、「引き取らなければ

よかった」後悔するようになった。

⑩Aの養育の返上を何度もしようと思ったが、兄(A2)に相談すると反対するので、思いとどまっている。

5)その他:

養育費等については、あまりに高額過ぎると世間の批判もあるだろうし。しかし、年齢が違っても養育費が同額なのはなぜか。とりわけ高校になったら、部活などの実費を請求できるという(以上)

10. (収録調整中*)きょうだいを預かる特別な難しさ

—3組のきょうだい里子を育てた日々の中で

*多忙のため、事例原稿のチェック未完成

11. 里子間に起きる嫉妬に配慮しながら

—ファミリーホームの中で

1)概要:

里親は平成22年からファミリーホームを経営しはじめた。息子が補助員をしている。

一時保護(1.2週間)も折々している。

里子の受け入れは、平成11年9月から。まず高校生を高3の夏休みから卒業まで預かったが、現在は30歳になったはずだが、その後は知らない。

現在の里子は、A4(18歳)と3人のきょうだいで、A(12才中1女子、3歳から)、A2(16才高2女子)、A3(10才小4男子、1歳から)。3人のきょうだいの父親は3人とも違い、母親は風俗で働いている。

2)里親の家族構成:

18歳の里子Aと、実の3人きょうだいの計4人の里子と夫婦で6人家族。独立した実子は30代後半が2人、20代後半が1人の計4人。里父は60代で宗教関係での事業をしており(子どもに会長と呼ばせている)、書道を教える。里母は60代で、お母さんと呼ばせている。

3)里子受け入れの動機:

友人に勧められてファミリーホーム経営を始め、1年2カ月。それまでの家は息子夫婦に渡し、別に5部屋の1軒家を借りてホームを運営している。

4)事例:

A:12才中1女子、(3歳から現在まで養育)

①身体:とても小さく、やせ過ぎ、偏食、小食

②性格:わりと強情

③学習状況:成績は下。生物が得意であとは全部苦手。勉強はとても嫌い、学校は普通に好き、宿題はなかなかしない、友達関係わりといい

④親子関係：3人の里子きょうだいと里親は、実親子のようなつながりがあり、わりと気が合っている。遠慮せず叱る

⑤現在の問題：成績が悪く、家に帰ればパソコンとゲームに没頭。実母のやっていたことをそのままやっている感じ。朝は布団から出ない。起きない。塾へ行かせているが、塾へ行かずに、歯医者に行ったと嘘をつく。塾の先生から連絡があり、問い詰めると死ぬと言って、手首を嘔む。固まる。学校では月に1、2度補習をやってくれるが、それは楽しいという。

⑥手こずっていること：里子間の嫉妬に手を焼く。衣服の購入などで、親がエコひいきをしているという。遅くなって里子に来た子は取りわけ嫉妬をする。だから買ってやるものは、すべて同じように、または同じ金額を渡すようにしている。

⑦心配していること：Aの進学。宗教が経営する寮に入れて、連携している保育専門学校に入学できるといいのだが。〇〇寮は30人定員なので心配である。

⑧委託を返上しようと考えたことは1度もない

5)その他：

①里子は3歳位から来ると、親子の間に気持ちが入る。それ以上遅いと難しくなる。

(極端な例だが)泥棒でもいいから、子どもは親がいたほうが良いと言う。遺影でもいいからと。

②実父母に恵まれない子は、(その子にもよると思うが)いつまでも愛情不足を思わせる行動をとる。スキンシップを行動で望んでいるような態度を取る。(以上)

2)不登校問題

12. 「助けて下さい」と叫んだ子

—今は不登校から抜け出し、高校の進学先も決まる

1)概要：

Aの実母は育児放棄でAを乳児院にあずけた。Aの兄も里子に出したという。

引き取った時は、実親は戸籍抹消になっていた。3年後に実母は病気を発症し、難病指定。生活保護を受けるため戸籍復帰した。児相経由で、実母は会いたいと再三言ってくるのが4～5年続いたが、下記の理由でお断りした。

①将来発展的な対面でないため

②Aは生後数カ月で手離されたので、顔もA自身が覚えていない

③病気で話も困難で、状態が衝撃的なために

④将来もしAがなぜ実母に会わせなかったかを聞いてきた時には、全面的な責任を覚悟している。

2)里親の家族構成：里母は40代、里父は50代で勤務者

里子はA(15歳)とA2(8歳)の2人で、4人家族、実子なし。実家が5分の場所にあり、何かと手助けしてくれる。できれば養子になってほしい。

3) 里親登録の動機：

夫婦で仕事ばかりで、子どもがいなかった。通勤の時に里親促進のポスターが目にとまった。子どもが家族を求めているなら、お互いに楽しい時間を共有できるのではと思った。

4) 事例：

A：15才 中3男子(4歳から11年間養育)

①初めの3か月(4歳の時)は、夜泣きで大変だった。大声で泣く。4歳からずっと続いた。夜寝るのも遅かった。小学校の時に大泣きして「助けて下さい」と玄関で叫ぶ。近所から通報があったらしく、翌日児相から担当が来た。

それ以前もAについて種々相談したが、「元気なお子さんで、お母さん大変でしょう」と言うだけだった。しかし通報があったら、即、翌日やってきた。専門里親を申請しようとしていたが、「専門里親の申請は次回にしては」と助言され、一連の成り行きが腑に落ちなかった。専門里親には難しい子が委託されるのに、こうした児相と2人3脚では無理、と判断して専門里親を申請するのをとり下げた。

②2人のきょうだいの違い：

上の子Aは自分を出さないし、下の子A2は自分を出す。2番目(A2)は、本当は乳児の女の子がほしかった。

両方とも交流期間中は里親になつかなかつた。A2は、乳児院で保育士にかわいがられて、保育士になついていたようだった。Aは来て1か月は2階に上がらせると泣き、玄関と居間にいた。布団も居間に敷いて寝た。7歳になった今は、「くっついてあげる」と言ってべったりする。

Aは養護施設にいた時、夏やお正月に周りの子は親が来たり外泊するのに、Aだけは1人残る子だった。家にもすぐ慣れて、お互いに1から生活のリズムを作り出すことができた。「僕の居場所」をすぐ作りだした子だった。下の子(A2)は、すでに上の子がいたので、必死に「僕の居場所」を探っていたように思う。

③小学校の時は全く問題がなかった。運動神経がよく、野球をやっていた。中学は私立の野球の盛んな男子校へ。5時から10時まで練習をする学校だった。

④ところが夏休み前から不登校。そのうち野球部の先生が無理に引っ張って車に乗せて登校させようとしたが、それから一層行かなくなる。公立小学校では「弟キャラ」を作り、その中にいたが、保護の受けられない厳しい私立中学校が合わなかったのか。

中1の1月にA2の健康診査の時に、校長に相談。学校を色々調べてくれる。本人もケータイで友人に学校の評判を調べて、3校のうちから1校を選んだ。

中2で転校。しかし1日目は行ったが、2日目から不登校。「みんなが見に来るので」という。養育返上も考えたが、小学校の時は地元で友人が多くて、(不登校を心配して)今も家に来てくれる。

面接を受けて半年。今は高校進学先も決まって、前を向いて歩き出した。

⑥発育と健康：当初やや偏食だった。

⑦性格：とても一甘えたがる。劣等感が強い。やや一わがまま、落ち着きがない、小心、感情の起伏が激しい。他人に警戒心が強い。暴力、嘘、約束破り多少ある。

ここぞという時の踏ん張りが足りない、周囲を気にし、どう見られているか気にする。

⑧学習状況：成績は中の下、数学が得意、苦手は国語。勉強はやや嫌いで、学校はとても嫌い、宿題は言われてする、友だち関係はわりといい。友人に悪いことを言わないので、したわれている。学校では弟キャラを作っていて、みなから「〇ちゃんだから仕方がない」のような受け入れられ方をしていた。

⑨親子関係：わりと気が合っている。しかし、ふとした時に「これはもって生まれたものかもしれない、どうして？」と思うことがある。里母の経験では理解できないような行動をするとき、踏ん張れない時など、とくにそう思う。思ったことは遠慮なく叱っている。

⑩真実告知：

毎年児相が「もう告知しましたか」と言ってくる。4年生で告知した。

下の子(A2)を2歳半で引き受けてから、Aが下の子をいじめるので、「あなたがいやなら返すよ」と言った。実親でないことを言おうとすると「分かっているからいいよ」と言わせない。下の子をいじめたある日、納戸に夕方呼んで説明する。「施設に里親があずけたのか、それとも自分を拾ってきたか」と聞く。「子どもがいなかったの、預かった。あなたは10才なんだから、どうするか決めなさい」と。「下の子は、もう帰さない」と言った。Aはすぐ「僕はパパとママの子でいていい？」と言った。里親会の仲間にも種々聞いていたらしい。下の子へのいじめは減った。またある時、「本当の子になれるのか」と聞いてきた。「今はもう親子で、パパとママの大切な子どもよ」と。

名字はずっと里親姓にしてきた。しばらく前から行政上通称でいいことになった。「困った親の子でいるより、里子のほうがラッキーじゃない？」とAに言っている。

⑪相談相手：◎親と里親会の仲間、次いで担任、児相の職員。ウンセリングは子どもが何度か受けた。

⑫悩み：現在は自己評価の低さ、不登校で悩む。性格的に自立できるかどうか。怠ける。どうせいやと投げやりな態度。ここ一番の時に踏ん張れない。将来これでちゃんと生活できるのかを心配している。学習面と自立に向かったの気持ちがないこと。

⑬委託の返上：

何度か思って児相に相談したが、結局「頑張りましょう」と。不登校で家で暴れ出した時にも、一歩外に出るときちゃんとできるので、里家にいるより別のところに行くほうが、Aのためになるかと。委託の返上をしなかったわけは、その時手放したら、Aは人を信じることや甘えることをしなくなってしまうかと思って、踏みとどまった。

5)その他：

<児相の問題点>職員が次々代わる。子担当と親担当は次々代わり、連携もうまくいっていないので、根本的には相談できない。もう児相には頼らない。

子ども担当は児童福祉司で、非行の子なども見るので手いっぱい。40人を抱えて大変忙しいようだ。(以上)

13. 「自分」という存在を人に見つけてほしかった子

—現在は(明るい)不登校

1)概要:

A (13歳 男子中学生) 小5の6月から現在まで養育。かつて、5歳11ヶ月で、一時保護所から来た事がある。施設から幼稚園に通っており、里親宅では保育園に通わせた。その後、いったん措置解除になり、親元に戻ったが、養育不適な状況が改善されず、5年生の6月から再度預かった。

2)里親の家族構成:里子と3人家族。里母は60代専業主婦、里父は60代で、その他の仕事。実子はいない。

3)事例:

A(中1、5歳11か月から現在まで、一時中断しながら養育)

①里家に来た時(5歳11か月)の様子

会話ができなかったので、小学校入学を目指して、言葉の練習をした。寝る前に日本昔話や童謡のCDをかけっぱなしにしたり、世界の童話(要約版)を毎晩読んだ。言葉が出るようになってからは、「しりとり」や「かるた」を取り入れ、数多く言葉を使うしかけを用意し、数か月後には日常生活に必要な会話力がついた。

家に来た当時はテーブルの下に隠れたり、布団にもぐったりして、「Aはどーこだ」と見つけてくれる迄呼びかけていた。後で分かったことだが、里親の会合で出会った幼児にもこうした行動が時折見られ、また他の里親からも同様の話を聞いた。親から世話を受けてこなかったために、自分がここにいること(存在確認)を訴えかけての行動かもしれない。

②小学校5年生から再来、中学へ入ってから

中学に入って2泊3日の合宿があり、その時友だちがお菓子をもって来てみんなで食べたらしい。先生から「きつく叱ったので、それ以上叱らないでほしい」と電話があった。Aは「楽しかった」と帰ってきたが、翌日登校して、その後現在に至る迄不登校。

③現在(中1)不登校中の様子:8時40分頃起床、ゲーム、ビデオ(映画)で過ごす。昼食の後、部屋に戻り、夜も同様。漢字書き取りだけはしている。11時か12時には寝る。先生が訪問しても会いたくないと言う。小学校時代から、宿題は全て必ず一人でやっていた。

④性格:スマイル賞をもらうほど、一日中ニコニコしている。おやじギャクやなぞなぞが大好きで、クラスで一番の人気者だった。思春期に入り、自立傾向が強くなってきている。

⑤学習状況:成績は下、授業での集中力はよく、学校での学習はほぼ理解している。学校に行くのは大好きで、開門前に着いていた。友だち関係はよく、友だちに家に泊まったり、友だちが泊まりに来たりする。SC(スクールカウンセラー)とのコンタクトはない。

⑥親子関係:とても気があっている。叱ることはほとんどない。かわいい。カウンセリングが受けられるという話は聞いたことがない。

⑦養育の返上：1度も思ったことがない。

⑧現在の心配：18歳で措置解除になった子どもが、仕事がなく、2、3年で、里親のところに戻ってきているという話を聞くことが多い。今すぐの心配はないが、18歳で委託解除後にすぐ経済的に自立できる時代ではないので、気になる。

⑨里親たちが「自分の子どもの時はこうでなかった」などと比較しているのを聞くことがあるが、自分は実子の子育て体験がないので、何が起こっても「まあこんなものだろう」と、とくべつに気にすることはない。

⑩不登校について

学校は行かないことは、子ども自身が決めた。自分で一大決心ができる迄に成長したのだと思う。学校へは行っていないが日々成長しており、自分の意思決定能力を着実に高めている。会話にも道筋が出てきた。今まで当たり前だと思って考えなかったことだが、学校とは何か、先生とは、家族とは？いわば子どもから、宿題を出されている。(以上)

14. (収録否)不登校と戦った日々

—実親でないからできた冷静な対応

Ⅲ) ゆりかごとしての家族と里母

15. 実家と違う文化をもつ里家に適応できなかった兄妹

—妹が父の家に戻って被護者の役割を失った兄

1) 概要：

高2の兄(A)と中3の妹(A3)の実のきょうだいの里子、および短期委託した里子(A3)の3人を養育。実子を育てた時はテレビも置かず、きちんとしたしつけ環境で子育てをした里父母だったが、兄と妹のきょうだいは、その環境になじまなかったのか、種々の経緯の中で措置解除。Aは看護婦として自立、現在も良好な関係を保っている。

2) 里家の家族構成：

里母は、60代の専業主婦、里父も60代。現在は里子はおらず、2人家族。今までに短期を含めて里子を10人養育した。実子は3人。

3) 里親登録の動機：

里母の実父はハルピンに拘留されていた。生前くわしい話をしないままだったが、平成になって死去。里母はハルピンへ追悼旅行に行き、4月に里親募集を新聞で見つて応募した。

4) 事例

<事例1> A3—庇護する妹を失い進学を断たれて家を出た兄

措置解除になった妹(A2)と措置変更された兄(A3)は、親の死後、何軒かにたらいまわしさ

れた後に里家に預けられた。

①高2兄(A)と中3妹(A2)は実の2人兄妹：

実母に育てられたが、実母が死亡後、祖父母に引き取られたがうまく適応できず、他の里親宅に預けられたが、やはりうまくいかなかったという。見相で里子と対面して、その日のうちに「うちにくる？」となったが、交流期間が短くて、あとで後悔した。生活習慣、学業成績、学校への出席状況など、よく理解していなかった。里子側にしても、テレビのない生活など考えられなかっただろう。

②しつけ環境の大きな違い

里母は厳しく実子を育てたので、兄妹にもそのような環境に置いたことになる。多分2人にはカルチャーショックがあったと思う。こんなはずではなかったと思ったのではないか。里母は「バイトより学業を優先しなさい」とも言っていた。実子はテレビも買わない、塾にも行かせないで育て、今になると里子2人には不満が大きかったと思うが、兄妹は口には出さなかった。妹は兄に塾に迎えに来てもらっていたが、塾から戻らないこともあり、家に帰りたくないと言って兄に殴られたこともあった。

あるとき突然実父から「引き取りたい」と電話があった。兄は引き取られることを拒否、妹は「どちらでもいい」と言って、結局妹は実父と一緒に戻り、兄だけが里家に残ることになった。

③大学進学で里父と対立した兄

兄は妹に優しく、妹の保護者会等にも出席し、食事も作ってやった。勉強するよりその役割(親の役割)のほうが気持ちの張りになっていたのかもしれない。兄は妹が実父のもとに行った後で、妹の世話をする役割を失った。

その後、奨学金のことで家族内でトラブルが発生した。里父と兄は奨学金を受けることに賛成で、里母と担任は反対だった。兄は「申請しない」と言っていたのに、後日、嘘をついて申請していたことが分かる。

④里親里子間の溝

このことから、兄に対する里母の信頼感が失われた。兄は身長が高かったので、里母は兄を怖いと思うようになる。兄も里母を「正義感の強い怖いおばさん」と思ったのではないだろうか。里父が夏休みに出張した時などに、23日2人だけで家にいると緊張して心理的に大変だった。

高3で兄は大学へ行きたいと言い出し、里父と対立し、きつく叱られた。ちょうどその日は実母の命日だったらしい。兄は墓参に行き、そのまま里家には帰らなかった。一時保護所に行ったのではないかと思う。その後連絡はない。

その後1度里親登録を更新し、「短期の受託はどうですか」と見相から言われ、それを行っている。「初めの兄妹に事例で失敗した経験の上に築いたAとの生活です！」と里母は言う。

<事例2> A：22歳女子—今は看護師として自立し、里家と良好な関係にある女性

17歳から1年3か月養育。施設生活の経験はない。

Aは、中1の時に実父が死亡。前年には実母も死亡。高2の12月から卒業まで1年3カ月里家にいた(短期委託)。里母と2人で伊勢旅行もした。親子で同じ体験をすることが大事だと思う。自立させようと18歳で家から出すことにした。それまで身の回りのことを里母に依存していた子だった。「実父が病気になったのに気がつかず、看護してあげられなかったから、看護

師になりたい」と言いだし、地方にある〇〇病院付属の看護学校に入学した。看護学校では、追試の女王だったようだ。今はお礼奉公の期間で、〇〇病院のある地元にいる。ある人にX線技師になることを勧められたが、よく気がつくところがあり、里母は看護師になることを勧めた。

①現在の身体状況：

身長が小さい、よく風邪をひく、アレルギーがある。当初の身体状況も身長が小さく、よく風邪を引いた。

②性格：少し人みしりする。言葉が荒い。劣等感、警戒心が強く、反省心がない。

素直にあやまらない、人とケータイを通じて話す等が気になる。初めのころは、里母の布団に入ってくるなどした。

③学習状況：勉強はやや嫌い、学校はやや好き、友達関係はわりとよかった。

高校まではあまり勉強しなくてもよかったが、専門学校ではずっと成績がわるく、追試を繰り返かえしていた。

④親子関係：わりと気があっていて、話をするのが楽しかった。里母はAが現在ちゃんと暮らしているかを心配している。複雑な家庭に育ったが、長女的性格で人のいうことを聞く子。里母はのんびりタイプで、Aは「そこが好き」と言ってくれる。いつもできるだけ叱らずに我慢していたが、門限を守ることは随分きつく言って叱った。

⑤養育の返上をしたいとは、1度も思わなかった。(以上)

16. うちとけない里子に家族からの反発が出始めて

—実母への思いが強すぎた子

1)概要：

A(4歳女子 幼稚園児)*心理的虐待児

短期専門の家庭で、これ迄に短期の養育家庭2回を経験した。1回目のA3の養育は1か月半で終わり、その後2か月して姉妹の里親をした。老親介護の可能性あることを話したら、児相から短期委託を勧められた。

2)里家の家族構成：(現在は委託がなく、実子と3人家族)

里母は50代の専業主婦、里父は50代の勤務者。実子は20代後半が2人。1人と同居中。

3)里親登録の動機：

以前「日赤子どもの家」の近くに住んでいた。見学するとベットがずらりと並び、30人の子どもが大声で叫んだり泣いたりして、喧騒の中にいた。男の子がべたべたしてきた。不憫だった。実子が成人した時、何かしようと思ひ、パートに出るのもどうかと思っていたら、新聞で養育家庭募集の記事を見た。10数年前の子どもの家のシーンを思い出した。4人の両親が健在で、夫の親は大阪に住んでいて、手がかかるかもしれないと児相に説明したら、短期の養育家庭を勧められた。

4)事例：

<事例1>—実姉妹間でのきょうだい葛藤(A2と妹)の激しさ

A：4歳女子

①実妹への反発

住居提供所(災害で家を失った人のための住居)に、夫のDVから逃げてきた母と2人の姉妹がいた。母親は第3子を6月に出産予定だったので預かる予定でいたが、3月末に破水し、母親の福祉担当者から連絡があって、23日分の着がえと共に、姉妹(AとA2)がやってきた。下の子(A2)は泣く子で上の子(A)はすぐ寝る子だった。23日後に子担当が写真などを撮っていった。

1週間ぐらいして、A(4歳)の態度が変わった。2歳の妹(A2)に意地悪や暴力をふるい始める。閉じ込める、叩くなどが日増しにひどくなる。ある時はベビーカーに下の子を入れ、頭をひどく殴る。児相に通報して見に来てもらう。1週間後に児相(担当者)が来て、実母のところに姉妹を連れていくことにしたと言う。子どもたちは生まれた弟を見て可愛かったと言って、帰ってきた。

〇〇児相の親担当と〇〇児相の子担当には上下関係があるのか、両者の連携がうまくいかない感じだった。

Aは「自分の母親が全て」の子で、里母のやり方が実母と違うと言って反発する。里母は自分のことを(お母さんではなく)「みっちゃん」(仮名)と呼ばせていたが、下の子(A2)は時々「ママ」と言った。Aは、自分にはママがいるので、里母を「みっちゃん」と呼び、妹がママと言うのに反発する。自分の頭を打つ(自傷)などが始まる。出生家族で妹思いと思われていた姉の豹変ぶりは、実母に信じられないとか。姉として、「DVを受ける母親を守らなければ」という意識が強かったAだったのだろう。

②健康と発育：とても一よく風邪をひく、わりと一偏食で運動神経が鈍い、

③性格：とても一小心、感情の起伏が激しい、わりと一わがまま、素直でない、人に心を閉ざす、警戒心が強い、パニック、すぐ暴力に出る、

年齢の割に、物わかりよくしてきた生活が、里家にきたことで、今まで抑えていた子どもながらのわがままや、甘えが爆発したようだった。自分の感情が抑えられないことが多々あり、実母にその様子を伝えると信じられないようだった。

④親子関係：

何となく気持ちが通じ合わない。実母への思いが強く、その他の人に心を開かないように見えた。わざと嫌われる行動をするなどが痛々しかった。余りきつく叱らないようにしていた。

⑤相談相手：

◎里親会の仲間、児相の職員、子どもには何度かカウンセリングを受けさせた。

⑥家族の反発

その頃実子2人は大学を卒業して社会人となった。長女は入社式の日Aに風邪をうつされて高熱のまま出席し、合宿へ。長女は文句は言わなかったが、それから母親と口をきかなくなる。母親の手助けもしなくなる。家族が2階から下に降りて来なくなる。長男に「10分だけ子どもをみていて」というと「ママが引き取ったんじゃない」という。実子から反発された。

⑦絵の中に里母が描かれる

午前中公園に連れていっても、5歳児がいないので飽きてしまう。そのうち子ども園のPRをみて、1.2時間工作などをやらせてみた。楽しいという。ある時先生に「はじめて笑ったね」と言われる。内弁慶な子だった。5.6回通園した頃から、迎えに行くと里母の顔を見て笑って、抱きついてくるようになった。それで2人で、家で靴作りをした。それを大事にして、よそへ行く時ももって行って履く。絵を描き始めたが、真中にピンクの服を着た自分、隣に黄色の服の妹、自分のとなりに青い服を着たみっちゃん。里母を初めて絵に入れてくれた。「この絵を大事にする」というと、Aははにかんだ。

⑧別れの日：

なぜか〇〇児相の職員が実母に住所と電話を教えてしまったので、初めは週1か2週に1度、実母から電話がくるようになる。里母と話し、実子にも話させる。そのうち回数が増えてくる。実母は子どもと話す種がなくなり、より多く里親と話すようになる。そのうち養育費等が出ていることを知ってか、「これこれのおもちゃを買ってほしい」と言うようになる。それは困ると児相に言うと「伝えましたよ」と言うばかりで実効がなかった。

3か月の期限が来て返す日も、実親が真っ先に来てしまう。姉は大喜びで、妹はぼんやりした感じ。その後に児相の親担当と子担当が来る。里母は自分なりの別れ方をしたいと思っていたのに心が残る。

<事例2>以前の短期委託児A3について

2歳半の女の子A3を引き受けた。母親と母の弟(18歳)は刑務所にいた。祖母は内縁の夫と全国を転々としながらA3を育てていて、A3も名前を転々と変えていた。実母が内縁の夫と別れたことにして、生活保護を申請し、祖母がA3を育てていた。その後祖母はパニック障害を起こし、少し体を休めればと、孫(A3)は一時保護所に引き取られ、そこから里家に委託された。1年間の契約だったが、実際は1ヵ月半で終わった。賢い子で、今も思い出す。

A3は情緒不安定で、笑っていたかと思うと、暗くなる。電気を消さないでという。人の気配に非常に敏感。外のトイレにもトラウマがあるのか嫌がった子だった。パチンコ屋の前を通ると「入ろう」とせがむ。母がパチンコをしていた間、中で遊んでいたとか。そうした暮らしをしていたのかと切ない。

5)里親としての今後：

種々あったものの、長女が病気から回復したら、また里親をしたいと里母は言う。

「予想していた親の介護ではなく、成人した娘が病気になり、家庭に里子を入れることが難しくなってしまった。しかし、登録時に思っていた里親になる決心と、短期間でも委託を受け、さらに社会的養護の必要性を感じている現在、まだまだ自分に納得できていないものがある。やり残した思いというより、まだ里親に1歩踏み出したままの感じです。

両親や娘は、今自分が里親登録をしていることに理解はしてくれています。しかし、両親には、老人ならではの心配な行動や症状が日々多くなっているように思われ、親も娘も自分の調子の悪い時に、私が里親支部の活動等を優先して外出してしまうことに、寂しさを感じているようです。あまり体力もなく、細かいところが気になる性格の私には、1度の多数のことを抱え込むのは、どれもが中途半端になる可能性もあります。

でも私自身、社会的養護を受ける立場になった子どもの不安感が理解できる部分も多くあり、少しでもそうした子どもに寄り添いたいと思う気持ちから、やめるにやめられない。無理はせずに家族の状況を見ながら判断していこうと思っています」(以上)